それぞれの作品に対して

鈴木裕美

『光と虫』

私は台所の食器や調理器具、調味料などの完璧な収納の配置について、いつか時間を取ってじっくり考えたいと思って 20 年は経つ。人は皆、それについていつかじっくり考えたいと思っているのに、日々の生活に追われて永遠に後回しにしてしまっている事柄があると思う。そして、手軽に YouTube の整理収納の動画などを眺めてお茶を濁してしまうのだ。

コロナとは私たち人類にとって何であったか、世界中の人が一度じっくり考えたいと思っている事柄だと思う。だからこそ、この劇作家の思考はそこにたどり着いたのか！ というものが読みたかった、と思ってしまった。世の中には日がな一日、収納のことだけを考えている人がいる。その人の YouTube は目から鱗で面白い。例えが適切でないかもしれないが、恐ろしいほどの時間をかけて、怠けている私たちの分まで、何かについてとことん考えてくれること。それは作家に期待されていることの大きな一つだと思う。

『トレマ』

「人生は自らの努力で切り開いていける」その幻想が、かつてあった。今、遺伝子の解析が進み、努力できる人格か、努力は苦手な人格か、生まれた時点で予め決まっていることがわかってきたそうだ。では、全ては「ガチャ」、運ではないのか。全てが「ガチャ」である時、私たちは何に頼って、何を信じて、生きる気力を奮い立たせれば良いのだろうか？

その答えを見つけようとする戯曲だと感じた。これも、私がいつか時間を取って考えたいことの一つだし、世界中の多くの人もそうだろう。この戯曲の中で、登場人物たちはさまざまな形で「身の程」や「生きづらさ」について語っているが、その口調は、登場人物のそれではなく、劇作家自身が語っている、言わばエッセイのようだと感じてしまった。ラスト間際、佐倉井が円山のところに戻ってきたこと、この物語を通して見つけた、その答えの美しさを思いきり享受できなかった理由は、そこにあるように思う。

『てばなれ』

実のところ私には、私道さんがどんな確信を持ってこの戯曲を書き進められたのか、さっぱり想像できない。でも戯曲は圧倒的な確信に満ちているように感じる。そこがとても素晴らしいと思う。それは、とてもオリジナルでミステリアスでセクシーだ。

そして私は演出家として、劇作家の確信を自分なりの確信にするための方法、つまり演出プランを自動的に考え始めてしまう。大勢のダンサーで、セラピストの動きや気持ちを拡張して表現したり、絵を描く学生たちや、着物会社のお偉いさんを演じてもらったらどうだろう、とか。俳優や演出家を刺激する戯曲だと思う。私道さんが次に何を書くのか、とても楽しみだ。

『躾けられない獣の群れ』

私は俳優のもっとも重要な仕事は、演じる登場人物がどういう状況に置かれているかを丁寧に想像することだと思っている。もちろん、劇作家が伝えたい言葉を魅力的な媒体となって発信するという仕事もある。この作品に出演する俳優には、主にそこが求められているように思った。シーンや台詞は魅力的だと思う。しかし厳しい言い方をすれば、そこに登場人物がいないので、

俳優は登場人物の置かれている状況を想像するのではなく、自分自身の魅力を使って演じようとするのではないか、具体的に客席に向かって台詞を言うことが多い上演だったのではないか、という印象的を受けた。

選考会でこの演劇の成り立ち方を伺い、「あ、逆なのかな？」と気づいた。個々の俳優の魅力を伝えるために書かれた戯曲なのかもしれない。その成り立ち方を全く否定しないが、作者の語りたい美が登場人物に落とし込まれてはいないという思いは依然として残った。

『そして羽音、ひとつ』

この戯曲の登場人物たちにとても惹きつけられた。全員がグロテスクで醜悪と言っても良いと思う。しかし、全員に体温や匂いがあり、どうしようもなく生きている様が悲しくて切ない。作者の人間に対する、冷徹で容赦のない観察眼と、肯定して包み込む暖かい眼差し、それが両立している所に凄みがある。

タイトルの『そして羽音、ひとつ』に関しても、最後に老女が一人羽ばたいて脱出できた羽音、とも捉えられるが、鎖に繋がれた鳩のただ足掻いただけの羽音がひとつした、とも捉えられる。ただ、いずれにせよ羽音はしたのだ。その細やかな音に耳を澄ます行為に、作者が登場人物たちに希望を持ち、応援していることを感じ、胸が熱くなった。

『かぜのたより』

ある世代以上にしか伝わらないことは承知で書くが、荒井由実の「卒業写真」という歌を思い出した。

「♪あの頃の生き方をあなたは忘れないで／あなたはわたしの青春そのもの」

という歌詞である。第 28 回で佳作になった『その桃は血の味がする』にも感じたシニカルで、ある意味人を小馬鹿にしたような視線は健在だ。そこには明らかに恋や青春と呼ばれるものが描かれているが「黒い卒業写真」とか「卒業写真２０２４」といった質感だ。読んでいて感じるイライラも面白いと思う。しかし、どうも言葉が言葉としてのみ存在していて、紙の上に留まっている感じは否めない。選考会でも話題になったが、前作も未上演であることと、無関係ではないと思う。上演を経て、劇作家としてどのように変化していくのか、強く期待したいと思う。